ごあいさつ

みんなで創る、
活気あるまち

目　次

1 発刊によせて
3 町のすがた
4 町の歴史
5 生活環境
6 防犯・防災
7 社会福祉
8 保健衛生
9 コミュニティ
11 農林業
13 商工業
15 学校教育
17 社会教育
19 国際交流
21 行政
22 議会
23 スポーツ施設
24 文化施設
25 伝統･まつり
26 観光
27 特産品
29 ガイドマップ
31 文化財

序　文

五戸町は、豊かで美しい自然風土と、先人達の知恵や文化に支えられ、温かく力強い人々の笑顔が輝くまちです。

この素晴らしい資源を守り育て、町民一人ひとりがゆとりとやすらぎ、そして潤いに満ちた生活を築くために、「みんなで創る、活気あるまちごのへ」を本町の将来の姿として、その実現を目指します。

発刊によせて

五戸町長　三浦　正名

五戸町は、緑豊かな美しい自然に恵まれ、先人達の知恵や文化遺産を現代に伝えています。

平成１６年７月１日、平成の合併としては青森県内第1号として五戸町、倉石村が合併し、新五戸町が誕生いたしました。この時に、新たなスタートの指針となる「新五戸町総合振興計画」を策定し、本町の目指すべき将来の姿を〝みんなで創る、活気あるまち「ごのへ」”としております。この実現に向けて、町民と一体となって新しいまちづくりを進めていきます。

この町勢要覧は、五戸町の特性、個性を活かしたさまざまな施策と今日の町の姿の一部を紹介したものです。

当町をご理解していただく一助となり、今後のまちづくりに一層のお力添えをいただければ幸いと存じます。

町のすがた

■位　置

本町は、青森県の南東部に位置し、八戸市から西に約15.5km、十和田市から南東に約12.5kmの距離にあります。

東は八戸市、西は新郷村、南は南部町、北は十和田市・六戸町・おいらせ町とそれぞれ接し、東西約20.7km、南北18.6kmにわたり広がる北東・南西方向に長いほぼ楕円形の形状を成し、総面積177.82㎢を有しています。

■地　勢

戸来岳に水源を発し太平洋に注ぐ五戸川と、新郷村温泉沢に水源を発し馬淵川に注ぐ浅水川の２本の川が、ほぼ並行して町を貫流しており、この２つの川を挟んで集落が形成されています。平坦部は、水利を得て水田が開け、奥羽山脈の東に発達した穏やかな丘綾地帯は畑や果樹園などに利用されています。

■気　象

本町における気象の最も大きな特徴は、夏季に「ヤマセ」とよばれる冷湿な北東風が吹くことであり、このヤマセはしばしば低温・長雨を伴い、農作物に影響を及ぼすことがあります。

しかし、北東北に位置しながらも、年間を通して寒暖の差が比較的小さく、積雪が少ないなど穏やかな気候に恵まれています。

交通のご案内

- ●JR八戸駅から・・・・・・・車で20分
- ●三沢空港から・・・・・・・車で50分
- ●青森空港から・・・・・・・車で120分
- ●八戸ＩＣから・・・・・・・車で30分

町の歴史

本町に人々が定住したのは、数々の遺跡の発見から５千年以上前の縄文時代までさかのぼると考えられている。文治５年（1189）、甲斐国南部三郎光行が、軍功によって糠部（今の青森県三ハ・上北地方など）の五郡を授けられたのがいわゆる南部氏の始まりであり、この糠部地方が軍馬の育成に適していることから、九つの戸（牧場）に分け、さらに、東西南北に分けた四門九戸の牧場制が敷かれ、ここから五戸の地名が誕生したといわれている。史書に残る最も古い記述では、寛元４年（1246）、鎌倉幕府の執権、北条時頼が左衛門尉平盛時に下した知行状に「陸奥国糠部五戸」という記述が見られる。

当時、この糠部地方は南部氏が統治していたにもかかわらず、平盛時を地頭の代職に任命していることは、南部氏には属さず、幕府直轄地であり、また、糠部五戸とは、一つの集落の名ではなく、田畑・牧野・郷を包含した広い地域名であって、永仁５年（1297）の五戸郷々の検注状（土地測量報告書）の五戸郷々に相当する地域（新郷・倉石・五戸・八戸市豊崎町・市川町といった戦前の１町７ケ村）と推測されている。慶長以後南部氏に属し、地方の産業、経済、文化の要衝として、南部藩独自の通制の五戸代官所が置かれ、五戸通りは三戸郡下１３ケ村、北郡下（今の上北郡）15ケ村、合わせて28ケ村の司法、行政、警察権を統括し、藩政末期には1万４,170石を領していた。

明治２２年４月、町村制施行により五戸村となり、大正４年11月に町制を施行して「五戸町」が誕生した。昭和３０年7月五戸町、川内村及び浅田村が合併し新五戸町が誕生。さらに野沢村手倉橋、豊崎村豊間内の一部を編入。平成１６年７月、倉石村を編入合併して現在に至っている。

古くから馬産地として知られ、米、りんご、野菜を基幹作物として葉たばこ、畜産等との複合経営による農業が基幹産業であるが、八戸地区新産業都市の指定を受けて以来、地蔵平工業団地に企業誘致を進め、農工併進の町として発展の一途をたどっている。